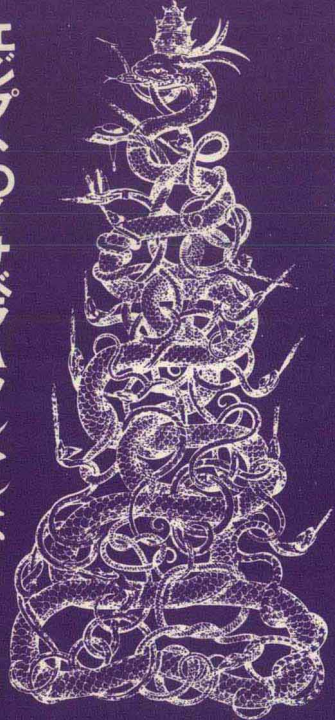


Isabella von Ägypten; Achim von Arnim



紀田順一郎 荒俣宏 責任編集

世界幻想文学大系④



エジプトのイサベラ A ウォンアルニム

Isabella von Ägypten: Achim von Arnim

深田甫 訳

世界幻想文学大系 責任編集—紀田順一郎十荒侯宏
第四卷

エジプトのイサベラ

昭和五〇年十二月一日印刷 昭和五〇年十二月一日初版第一刷発行

著者—ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム

訳者—深田甫

発行者—佐藤今朝夫 発行所—株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京六五二〇九

造本—杉浦康平十鈴木一誌

印刷—セイユウ写真印刷株式会社十明和印刷株式会社 製本—大口製本印刷株式会社

定価—一、八〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえします



深田甫 ふかだはじめ

一九三四年、千葉県生れ。

慶応大学大学院修士課程終了。

現在 慶応大学教授。

専攻 ドイツ文学。

主要著訳書—

『沼での仮象』（詩集）

思潮社、一九六三年。

『ゴットフリート・ベン詩集』

書肆ユリイカ、一九五九年。

『ホフマン全集』（全十巻）

創土社、一九七三年—。

責任編集—紀田順一郎(筑波大)



↓カソット 渡辺一夫+平岡昇=共訳
Le Diable Amoureux: Jacques Cazotte

② マンクM.G.ルイス 井上二夫=訳 ☆
The Monk: Matthew Gregory Lewis

③ ウーランドC.B.ブラウン 志村正雄=訳
Wieland or Transformation: Charles Brockden Brown

④ エジプトのイザベラA.ラシアルニム 深田南=訳 ☆
Isabella von Aegypten: Achim von Arnim

⑤ 放浪者メルモスC.R.マチリン 富山太佳夫=訳
Melmoth, The Wanderer: Charles Robert Maturin

⑥ セラフィタH.D.バルザック 沢崎浩平=訳
Séraphita: Honoré de Balzac

⑦ シイラ物語T.ゲーテ 田辺貞之助=訳 ☆
Roman de la Momie: Thophile Gautier

⑧ 魔性の女たちJ.バルドールヴィイ 秋山和夫=訳 ☆
Les Diaboliques: Jules Barbey d'Aurevilly

⑨ 魔術師W.S.モーム 田中西二郎=訳 ☆
The Magician: William Somerset Maugham

⑩ 魔女の箒W.デラマア 脇明子=訳 ☆
Broomsticks: Walter De La Mare

⑪ 悪魔の陽の下にG.ベルナクス 木村太郎=訳 ☆
Sous le Soleil de Satan: Georges Bernanos

⑫ 詩人と狂人達G.K.チェスタトン 福田恆存=訳
The Poet and The Lunatics: Gilbert Keith Chesterton

⑬ 現代ドイツ幻想短篇集G.ライリンク 他前川道介=編・訳 ☆
Deutsche phantastische Erzählungen der Gegenwart: Gustav Meyrink u.a.

⑭ 万霊節の夜C.ウイリアムズ 鎌谷昭雄=訳
All Hallows' Eve: Charles Williams

⑮ 創造者J.L.ボルス 鼓直=訳 ☆
El Hacedor: Jorge Luis Borges

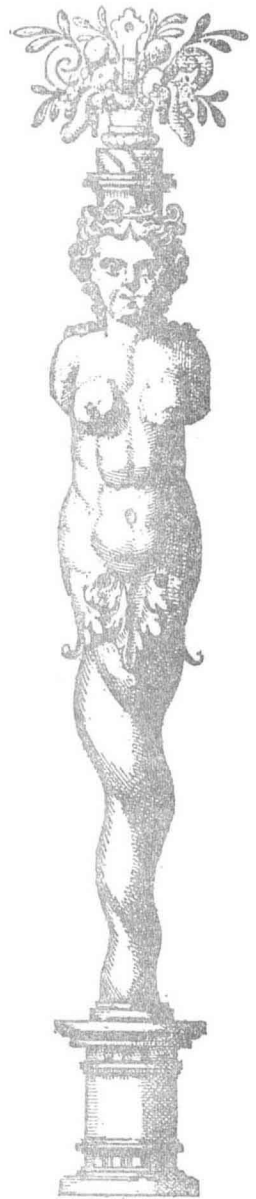
第期=十五卷
☆=次回配本 ☆=既刊





エジプトのイサベラ
ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム——深田甫二訳





目次

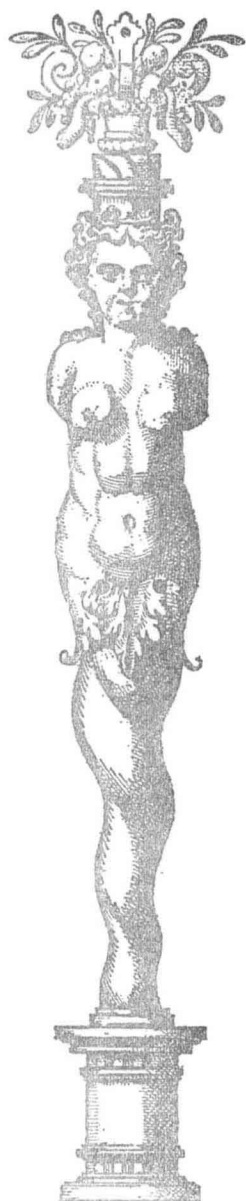
10 — エジプトのイサベラ ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム

10 — 狂気の傷痕兵、ラトノオ砦の上に在り

50 — エジプトのイサベラ

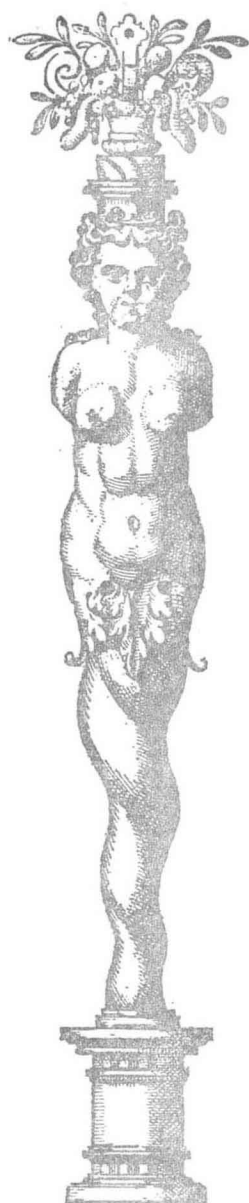
260 — アヒム・フォン・アルニム その生に拠る存在と表現の様式 — 深田甫





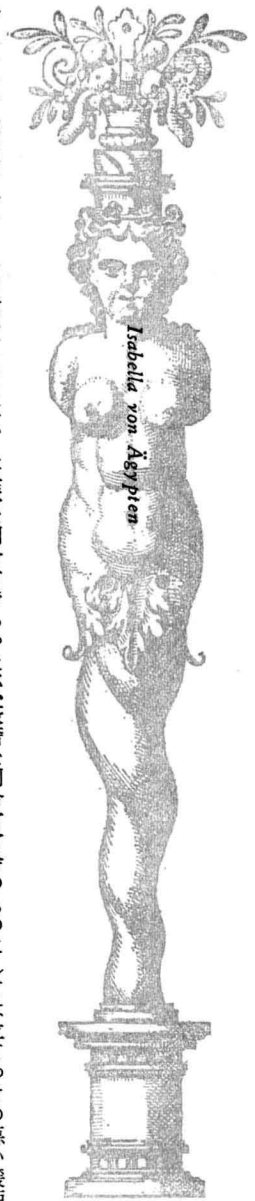
エジプトのイサベラ





狂気の傷痕兵、
ラトノオ砦の上に在り



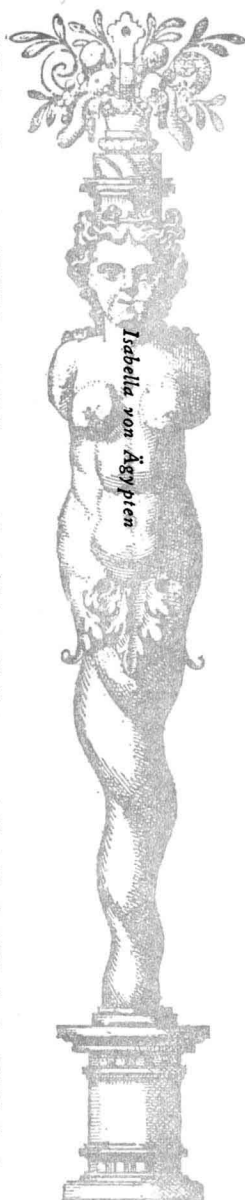


10

デュランド伯は、マルセイユの老いてるとはいえ立派な司令官であつたが、豪華な司令官官舎のものにしては立てつけの悪い暖炉のかたわらに独り腰かけて、十月のとある寒い嵐の吹きすさぶ晩、冷えに震え、すこしずつ椅子をずらしては火の近くに寄つていった。それなのに表の街路には大舞踏会へと向かう馬車の響きがひっきりなしに通り返し、近従の役を勤めるとともにこの司令官のこよなき話し相手でもあつたバセーは控えの間でかなり烈しい軀をかいて眠つていた。フランスの南部とはいふものの、かならずしも暖くはないな、と老紳士はおもひながら頭を揺すつた、人間もこの南部だからといって、かならずしもいつまでも若いままではいられない、それなのに、社交上の人の行き来ばかりは活潑で、ちやうど建物の造り方が冬のことなどおかまいなしであるのにも似て、老齡ということさえさっぱり考えてくれない。当時（七年戦争の間に）マルセイユとそれを固める砦をつぎつぎに占領した傷痍軍人たちの長であつた彼ではあるが、木製の義足を片脚につないで舞踏会に出てみたところであつた。自分の連隊の名うての少尉たちだつてダンスのためには援軍としての役になどはしなかつた。それよりもここの暖炉にへばりついていたほうが、この木製の脚もよほど役だつというものであつた。それというのも身近かに積ませておいた緑のオリヴの枝を薪がわりにしてすこしずつ炎の中に押し込むのに、ぐっすり眠っているバセーを起こしたくはなかつたからだ。そういう枝からあがる火にはたいへんな魅力があるもので、ばちばちはじける炎に緑の葉が織り紡がれ、燃えあがるともなく、緑色になるともなく、一枚一枚の葉が恋に溺れる心臓のように輝いて見えるのである。この老紳士もそのかたわらで若き日の栄光に想いを馳せ、その昔

にもすでに宮廷のために調製していたことのある仕掛け花火を組み立てる構想に浸りきり、つぎの国王陛下下の生誕日にマルセイユ中の人々を驚かしてやろうとおもって、色彩とか旋回とか新しくいっそう多様な仕掛けはないものかと思案に耽っていたのであった。今となつては舞踏会どころか頭の中のほうが空っぽにみえた。しかし、すでにどれもこれもうまく火花の尾を引き、しゅうしゅうと音をたて、爆裂し、やがてふたたび静かな大きさを拡張しながら照り輝く、そのさまが眼に浮かんで、成功した喜びに酔い痴れたかとおもうまに、ますますオリヴの枝を火の中に押し込んでいて、自分の木製の脚に火がついて、いつしか三分の一が燃えあがっているのにも気づかずになっていた。仕掛け花火の大団円、何千という打ち上げ花火がいつせいに飛びあがるさまが想像力に翼をつけさせ煽りたてたので、おもわず跳びあがろうとしたそのときになつてようやく、クッションの深い椅子に身を沈めなおそうとしながら、自分の木製の片脚が短くなつてしまつて、残りの部分もまだおかまいなしの炎に包まれているのに気づいたしだいであつた。すぐには起ちあがれないほどの緊急事態に、掛けていた椅子をピッケルで漕ぐ櫓のように炎を噴く脚で漕ぎながら部屋のもんなかへとずらしていくと、声を張りあげて召使いを呼び、水だ、水だ、と叫んだのであつた。この瞬間にちょうど、ひとりの女性が、息せききつて、援けに躍りこんできて、部屋の中に入るとすぐ慎しやかな咳払いをひとつして、司令官の注意を自分のほうに向けさせようと努めたのであつたが、うまくはいかなかった。女はかけていたエプロンで火を消そうとしてみたが、燃えくすぶる脚の炭になつたところからエプロンに火がつき、こうなつては司令官も現実の緊急事態発令とばかりに、悲鳴をあげて金切り声で救いを求め、人々





Isabella von Ägyptien

を呼びたてた。まもなく路地裏から人々が犇くように中に入ってきた。パセーも目を覚ましていた。燃えている脚、燃えているエプロンに、駆けつけた人々はいっせいにどつと笑った、とはいふものの、いちはやくパセーが調理場から汲んできたバケツの水ですっかり火は消えていて、そこで集まった人々はちりぢりに立ち去っていった。気の毒にも女は、かぶった水の雫をしたらせていて、すぐには恐怖から立ち直ることもできずにいたから、司令官は温いロクロール*1を彼女に着せかけてやったりえで、強い酒をかがせたのであった。が、女性はそのをいずれも受け取ろうとしないで、ひたすら身の上の不幸を訴えながら啜り泣き、司令官にむかって、ほんのすこしいから内密に話したいことがあると頼むのであった。そこで司令官はのろのろしていた召使いを立ち去らせる、慎重なものごしで女の近くに腰をおろした。「ああ、私の夫は」と、女は、異様なドイツ訛りのフランス語で言うのであった、「私の夫は、この話を聞いたら気が狂ってしまいます。ああ、気の毒なひと、きつとまた悪魔があひとに悪さをしているのです！」司令官が、その夫のことを訊ねると、女は、じつは大事な夫のことであなたださまのところに参ったのでございますが、ピカルディ連隊長の書簡をお渡ししたいのです、と言った。こちらの連隊長はそこで眼鏡をかけると、その紋章が友人のものであるのを識り、書面を一読してから言った、「では貴女があひ、ライプツィヒに実家をおもちのリーリエさんのお嬢さんで、歩兵軍曹のフランクールと結婚なされたロザリーエさんですか、たしかあひは軍曹が頭部に負傷して、ライプツィヒで捕虜になって入院していたときに結婚なさったのでしたな。聞かせてください、あひは世にも稀れな恋愛ですからね！ 貴女の御両親とはどういう

おかただったのです、貴女はすこしも支障なくそうなされたのでしたか。貴女の御主人は、あの連隊一の勇猛果敢な、才腕ある軍曹で、あの連隊の魂とまで言われて尊敬されておりましたのに、頭に怪我を負った結果、何やら悪ふざけのすぎる気紛れに取り憑かれなさったのではないかな。——「閣下」と、女はあらたに憂愁の色をみせながら言った、「私の愛にはありとあらゆる不幸の

なせる罪がこもっているのです。私は夫を不幸にしてみましたのです。あの傷がそうさせたものではありません。私の愛があのかのうちに悪魔を連れこんでしまい、あのひとを苦しめ、あのひとの正気を縛らせているのです。兵隊たちと教練をしているのかとおもえばそうではなくて、悪魔に吹き込まれたものすごい跳躍の仕方を兵隊たちのまえでして見せ始めることもたびたびで、そのうえそれを真似てみると要求するのです。かとおもえば、顔を響めて見せ、それはそれはぞっとするほどで、兵隊たちも手足のすみずみにまで恐怖が流れるぐらいですが、そのうえそれを見させているあいだは休めをしてはいけない動いてはいけないと要求し、最近など、それはもうついにここまできたかとおもうほどどうにもならないことですが、ある事件で連隊に退却を命じた指揮官の將軍を、馬上から投げ落とすと、自分がその馬に跨り、その連隊ともども砲兵中隊を引き連れて突撃するという始末でした。——「何と悪魔めいた奴だ」と、司令官は叫んだ、「そういう悪魔が我が全軍の指揮を執る全將軍の内部で跳梁跋扈しようとも、我々はも

* 1771年のフランスのロクロール公にちなんで名づけられた、肩のあたりに幅の広い襟のついた、長くてゆったりした男性用の上衣であるが、ルイ十四世の時代にはやって、十八世紀当時は旅行用のマントとして用いられていた。

